

漢法苞徳塾資料	No. 291
区分	疾病論・病証
タイトル	李東垣の五邪相干論
著者	八木素萌
作成日	1991.07 伝統医協：難経講義資料

◇『医学発明』の終のほうに「五邪相干（謂賊実微虚正也）」が記述されているが、副題から判かるように明らかに『難経』「四十九難・五十難」の五邪論の臨床的な敷衍として記述したものである。

「五邪」概念には複合的な意味がある。その一つは「中風」「傷暑」「飲食劳倦」「傷寒」「中湿」の五種類の「邪」つまり「風一木」「暑一火」「飲食劳倦一土」「傷寒一金」「中湿一水」の五行の「邪」の意味であり、いま一つは「実邪」「正邪」「虚邪」「微邪」「賊邪」の五種類の「邪」の性質と病臓との関係性を言うものである。「実邪」は病臓の五行性に対して「子」の位置に位する「邪の五行性」によって病んだ場合に「実邪による病」とするものを指している、「正邪」は病臓の五行と同じ五行性の病邪を指し、「虚邪」は五行的には「親」の位置の病邪を指し、「微邪」は五行的には「侮」つまり病臓の五行性がもともとは剋している位置にある病邪のことであり、「賊邪」とは「微邪」とは反対で常には剋されている五行的な位置に位している病邪のことであり、李東垣と『難経』の相異している部分は「土」邪と「金」邪の把握である。『難経』が「飲食劳倦」としているのに対し『李東垣』は「湿」を「土」としているのである。李東垣は『素問』「陰陽応象大論第5」の配当に引き戻しているのである。この「土邪」が「湿」であるか「飲食劳倦」であるかには精密な検討が必要である。同様なことが『難経』の「金邪」と「陰陽応象大論第5」の「金邪」についても存在し、また同様に「水邪」についても存在している。

『素問』「陰陽応象大論第5」では「金」は「燥」に、「水」は「寒」に配当されている。『難経』では「金」は「傷寒」、「水」は「中湿」とされている。

この相異をどのように把握するか？の問題は、実は临床上では重要な問題でもある。「湿」について見れば、

「陰陽応象大論第5」には

「在天為湿」「在變動為噦」「湿生土」「在体為肉」「湿傷肉」「脾生肉」「脾主口」「地之湿気感 則害皮肉筋脉」と在り。

「金匱真言論第4」には

「長夏善病洞泄寒中」「中央為土病在脾俞 在脊」「知病之在肉」と在り。

「生氣通天論第3」に

「因於湿 首如裹湿 熱不攘 大筋綆短 小筋弛長 綆短為拘 弛長為痿 因於氣 為腫四維相代 陽氣乃竭」

「陰陽別論第 7」に

「所謂陰者 真蔵也 見則為敗 敗必至也 所謂陽者 胃脘之陽也 別於陽者 知病処也 別於陰者 知死生之期」と在る。

「六節蔵象論第 9」には

「五味入口 蔵於腸胃 味有蔵所 以養五氣 氣和而生 津液相成 神乃自生」と在り。

「陽明脉解第 30」には

「陽明者胃脈也 胃者土也 故聞木音而驚者 土惡木也」と在り。

「太陰陽明論第 29」には

「脾病而四支不用 何也 歧伯曰 四支皆稟氣於胃 而不得至經 必因於脾 乃得稟也 今脾病不能為胃行其津液 四支不得稟水穀氣 氣日以衰 脉道不利 筋骨肌肉 皆無氣以生 故不用焉…」と在り。

「八正神明論第 26」に

「故養神者 必知形之肥瘦 榮衛血氣之盛衰 血氣者 人之神…」と在り。

「湿は土に生じ」「体に在りては肉と為り」「湿は肉を傷る」「地の湿氣に感じれば皮肉筋脈を害なう」「湿に因れば 首めは湿を裹みて 熱攘われず…拘を為し 痿を為す…陽氣すなわち竭く」「所謂陽とは胃脘の陽なり 陽を別つものは病処を知るなり…」

「燥」について見れば、